

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02626

研究課題名(和文) <第二世代>のホロコースト文学研究 - 1980年以降のドイツ・オーストリアを中心に

研究課題名(英文) Studies on "Second-generation" Holocaust Literature : Focusing on Germany and Austria since 1980

研究代表者

福間 具子 (Fukuma, Tomoko)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：50376521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1980年代から文壇に登場した、ホロコースト犠牲者や被害者の子ども世代による文学、いわゆる<第二世代>のホロコースト文学を対象に、それらがどのような主題を、どのような手法で表現しているかを分析した。そこからは、これらの作品が、体験していない記憶と主体的かつ客観的にかかわるために、アイデンティティが分裂し、二重化された自己を描きだしていることが確認された。これらは、戦後ドイツ、オーストリアの精神史と平行するものであると同時に、ドイツ語圏に限定されず、グローバルな視点での戦争記憶の継承の仕方とも関わるものであり、記憶論の議論に最新の視座を提供するものであると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ドイツ語圏のユダヤ系作家が1980年代から現在に至るまで、薄れつつあるホロコースト記憶とどのように関わり合い、それを現代社会とどのような結び付けしているのかを実例の詳細な分析とともに示したものである。ホロコーストの記憶を過去のものとして歴史化できないドイツ、オーストリアの戦後精神史の実相を示すものであると同時に、ヨーロッパに限定されない、全世界的に議論されている戦争記憶のナラティブについての知見を提供するものであり、21世紀の記憶論の先端的現象であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on literature by the children of Holocaust victims and that has appeared in the literary world since the 1980s, the so-called "second generation" Holocaust literature, and analyzes the themes and methods used in its expression. It was confirmed that these works depict a split identity and a doubled self, as they relate subjectively and objectively to memories that they did not experience. These works run parallel to the intellectual history of postwar Germany and Austria, and at the same time, they are related to the way war memories are passed down from a global perspective, not limited to German-speaking countries, and are thought to provide a new perspective for discussions of memory theory.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ語圏文学 ホロコースト文学 ユダヤ系文学 ホロコースト第二世代 現代文学

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の基盤、背景となるホロコースト文学研究には三つの時代区分が存在する。(1)1940年代後半から発表された、直接的ならびに間接的ホロコースト体験者たち(ホロコースト第一世代)による作品、(2)1980年代後半から発表された、ホロコースト体験者を親に持つ世代(ホロコースト第二世代)の作品、そして(3)アラン・ベルガーが2010年代に初めて指摘した、2000年以降に発表され始めたホロコースト第三世代の作品である。

(1)第一世代の作家と主題：この範疇に属するのは、強制収容所や絶滅収容所からの生還者(P.レーヴィ、E.ヴィーゼル、R.クリューガー等)の作品群と、ナチスの反ユダヤ主義政策を契機に各地に亡命した人々(P.ヴァイス、J.リント、G.ヴァイル等)の作品群である。これらの作品群には、事実を伝える記録的作品のみならず、虚構を伴い文学作品化されたものも含まれ、残酷な体験を表現する際に想像力を用いて芸術化することの是非が多くの議論を呼んだ。例を挙げると、G.スタイナーは評論集『言語と沈黙』(George Steiner: Language and Silence, Atheneum, 1967)において、理性の範囲外にある「アウシュヴィッツの世界」には沈黙がもっともふさわしいとしつつも、「人道的に合理的な真実の創造」のために言葉に生命を取り戻すことに賭ける可能性を示唆し、L.ランガーは『ホロコーストの文学』(Lawrence L. Langer: The Holocaust and the Literary Imagination, Yale Univ. Press, 1975)において、「歴史的事実」に「想像的真実」という概念を対置させ、後者こそが残酷な経験を想像的に受け入れるための枠組みとなることを指摘した。

(2)第二世代の作家と主題：1980年代後半から、ホロコースト第二世代の文学が発表される。この範疇に属するのは、ドイツではB.ホーニヒマン、E.ディシェライト、M.ピラー等、オーストリアではR.シンデル、D.ラビノヴィチ、V.ヴェルトリプ等である。彼らは直接の迫害体験を持たず、かつ、親世代が実体験について黙秘する機会が多いことから、ドイツ、オーストリアを主たる故郷として育ちながらも、アイデンティティの根幹となる自らのルーツに欠落を抱えている点で共通している。その結果作品群においてもまた、N.フレスコが「幻肢痛(ファントム・ペイン)」と表現したように、自らに欠落した体験が与える自我の不確かさゆえに非ユダヤ人が多数派を占める社会の中で折に触れ葛藤に苦しむ様子が描き出される。

第二世代のホロコースト文学を統一したジャンルとして捉える研究は2000年頃から次第にドイツ語圏で発表され始め、H.シュルッフの優れた論考も生まれた(Helene Schruff: Wechselwirkungen, Georg Olms Verlag, 2000)。しかし、対象となる作家たちの生育環境が多様であることや、彼らの大半がまだ存命中で作品を発表し続けていることから、研究は現在進行形である。日本国内では個々の作家についての研究がいくつか発表されたものの、ドイツとオーストリアで政治的背景が異なることから、双方に目配せを行った<ホロコースト文学第二世代>という枠組みで捉えた研究はほとんどなされていない。

(3)第三世代の出現：A.ベルガーは第三世代と呼ぶべき世代の出現を指摘し、2016年にまとめた論考を発表することを予告していたが、その後出版は2017年に延期された(Alan L. Berger: Third-Generation Holocaust Representation: Trauma, History, and Memory, Cultural Expressions)。そのため、全貌は明らかとはなっていないが、新たな世代の出現は必然であり、研究をそこに繋げてゆくためにも、日本国内でもまず第二世代に関する包括的研究を進めることが急務であると言える。

ホロコースト文学<第二世代>は、戦後ドイツ・オーストリアの「過去の克服」の試みでは完全に解消しえない根深いユダヤ人/非ユダヤ人との緊張関係と、そこから生じる終わることのないホロコースト文学の系譜が両国の戦後精神史の水面下で持続し続けていることを証明する現象である。戦後ドイツ語圏文学を正しく認識するためにも、この第二世代のホロコースト文学の特性の理解が必須の課題であると言える。

2. 研究の目的

本研究では、1980年代後半から出現し、徐々にドイツ語圏戦後文学の中で重要な問題領域の一角を形成しつつあるホロコースト文学<第二世代>、すなわちホロコーストの犠牲者や生還者を親に持ちつつ自らは直接の迫害体験を持たない世代のユダヤ系作家による文学作品を対象に、(1)迫害体験の不在にも関わらず非ユダヤ人との間で日常的に生じる緊張関係という、彼らの矛盾する状況が、作品においてどのような新たな主題と表現技法を成立させたかを分析しつつ、(2)これらの作品群が延命させているホロコースト文学の系譜を体系的に可視化し、「過

去の克服」に取り組んできた戦後ドイツ・オーストリアの精神史の裏面で何が生じているかの問題提起としたい。

3. 研究の方法

本研究では以下の項目に沿って、段階的に調査、分析、体系化を行った。

- (1)ホロコースト文学第一世代に関する包括的研究内容の概要把握
- (2)ホロコースト文学第二世代作品群の収集と主題 / 表現技法の詳細な分析
ドイツ：B. ホーニヒマン, E. ディシャライト, M. ビラーを中心に
オーストリア：R. シンデル, D. ラビノヴィチ, V. ヴェルトリブを中心に
- (3) (2)の調査結果の複数の観点(概念の定義 / 主題上・表現技法上の区分の導入)からの体系化の試み
- (4)ホロコースト文学第三世代の最新動向調査

4. 研究成果

(1)2017 年度

研究初年次となる 2017 年度は、「ホロコースト文学第一世代に関する包括的研究内容の概要把握」と「ホロコースト文学第二世代作品群の収集ならびに読解、データベース化作業」を行った。

については、当初 L. ランガーの『ホロコーストの文学』や R. イーグルストンの『ホロコーストとポストモダン』などの主著とされている研究書を読み進める計画であったが、それ以外にもアルヴァックスの集合的記憶論や、アスマン夫妻による文化記憶論、マリアンヌ・ハーシュのポストメモリー論にも範囲を拡大し、戦争記憶論の文脈でのホロコースト文学論研究へと展開した。に関しては、研究開始時に把握していたものよりもさらに広範囲にわたる作品群を発掘し、体系化することが出来た。すなわち、第二世代の作品は、すでに代表作とみなされているものと並んで、実際には無名の作家による文学的価値があまり高くないものが多数存在することが明らかとなった。よって研究では、二次文献の中で言及されているだけで、これまでその存在を知られていなかった作品の収集にも力を注いだ。その結果、相当の数の作品とそれに関する情報を集めることが出来た。

またその調査の過程で、ホロコースト体験に過剰に共感した結果、犠牲者に過剰に感情移入し、「なりすます」という現象が頻発していることも確認された。(代表的な事例としてはヴィルコムルスキー事件が挙げられる。)これは単なる詐称ではなく、実体験が遠いものでありながら、共感したいと強く願った結果として、第二世代にとって看過しえない現象である。過度の同一化は、ポストメモリー論においても指摘されている現象であり、第二世代文学研究にとっての重要な問題領域である。今年度は、その点について考察する端緒を開くことが出来た。

(2)2018 年度

2018 年度は、研究実施計画に基づき、戦後ドイツ生まれ、あるいは幼年期にドイツへ移住し青年期を送った第二世代ユダヤ系作家の作品研究を行った。オーストリアに比べて該当する作家は少ないが、近年多数の作品を発表し、文壇の注目を浴びているのがマクシム・ビラーとエスター・ディシェライトであり、今年度は彼らの作品の読解、分析ならびに二次文献の収集が研究の中心的課題であった。彼らは、第二世代ユダヤ系作家として、「新しい傾向」を示している。ビラーは、ドイツで「過去の克服」が進んだ後の新たな現象として、病的なまでの被害者意識に苛まれるドイツ人と、そうしたドイツ人の罪の意識を刺激し続けるユダヤ人のサディスティックな側面を挑発的に描き出す作家である。彼は自伝的エッセイにおいても、「ユダヤ的」でなくてはならないことを強いられることに反発するドイツの若いユダヤ人の葛藤を描き出すなど、固定化したユダヤ人 / 非ユダヤ人の関係が時に逆転する病理を指摘しており、親世代のトラウマに縛られ続ける第二世代、という構造に亀裂を入れている点で興味深い作家である。ディシェライトは、第二世代として、「論理」ではなく「感覚」に神経を研ぎ澄まし、それを断片的性格の強い文章で描き出している。ユダヤ人であることから逃げたのち、やはり回帰することを決意する過程を描いてはいるが、そこには論理的な思考のプロセスがあるのではなく、むしろ「感覚」による親世代との繋がりでの発見があった。そうした点においても、彼女の第二世代としての自己省察は、ビラー同様、新しい契機を孕んでいると言える。こうした新たな兆候の発見は、続く第三世代への通路ともなりうることから、興味深い現象の確認であったと考えられる。

(3)2019 年度

2019 年度は、本務校の在外研究員制度を利用し、オーストリアのウィーン大学で客員研究員として活動できたことから、本研究を現地において大きく推進することが出来た。

まず、本研究の対象となる <第二世代> の作家本人である、ローベルト・シンデル氏、ドロン・

ラビノヴィチ氏、ルート・ベッカーマン氏と直接お会いし、作品についての詳細なインタビューを行うなど、今後につながる関係を構築出来たことに加え、本分野を研究対象とするウィーン大学、バンベルク大学の研究者と親しく交流し意見交換することも出来た。具体的には、ウィーン大学のイエリネク研究所に所属し、多くのシンポジウムに出席したことで、アクチュアルな政治性、すなわち「新しい反ユダヤ主義」と呼ばれる、イスラム教徒側や、左派、右派両方からのユダヤ人への攻撃が今日どのようなものであり、〈第二世代〉の作家たちがそれらと芸術を通してどのように対峙しているのかを間近に見ることが出来た。

他にも、作品と深く関連する場所を取材で訪問し、資料収集を行ったことで、作家たちが現地で過去のナチス政権下の犯罪といまだに関わり続けていることも知った。

このように現地を訪れることで得られた情報、資料は、〈第二世代〉という現象に関して包括的な研究結果をまとめるために、きわめて有意義なものであった。これまで作品と研究文献を通じてのみ得られてきた知見に、場という文脈を加えることで、より伝わりやすい形で研究結果をまとめることが可能になったと考えている。

(4) 2020 年度

2020 年度は、当初の計画では本研究の最終年度に当たっていたことから、2019 年度のオーストリア滞在時の研究成果も合わせつつ、情報の体系化、総合的分析を行う予定であった。また、きめ細かい総括のためにドイツ・オーストリアへ渡航し最後の調査を行うことを計画していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が世界的にとどまることがなかったため、渡航自体が不可能となり、国内外のシンポジウムも中止あるいは延期という状況となり、計画を変更せざるを得なかった。オンライン授業の準備等で大幅に研究時間が削られるなか、可能な研究として、作品読解、分析を進めることと、特に 2019 年度の作家とのインタビューや現地調査に直結する考察を執筆することに注力した。具体的には、〈第二世代〉を代表する作家であるローベルト・シンデルと、映画監督であるルート・ベッカーマンについて、彼らがショアーの記憶を重層的、連続的時間感覚でとらえている点を指摘し、それが象徴的に表れる詩作や映像作品を分析したものをシンポジウムにおいて発表した。また、当初想定していなかったが、〈第二世代〉の作家たちがいわゆる〈想起の文化〉と対峙し、そこに具象化される集合的記憶に対し個人の記憶を対置させた作品を生み出している点に注目し、それらについての考察を行っている。昨年度から大きく関心を寄せている現象は、ショアーを生き延びた人々が相次いで世を去る「証人の終焉」が進み、〈第二世代〉が世代交代に対し何らかの回答をしようとしている点である。研究当初はまだ〈第二世代〉の出現の方に関心が向いていたが、彼らが〈第一世代〉の消滅に対して起こすアクションからは、この文学的現象が新しい段階に入ったことが示されている。この点を最終的研究報告に含むことが可能となりつつあることは、大きな意義であると考えている。

(5) 2021 年度

2021 年度は、2020 年度のシンポジウムで発表した『〈第二世代〉のユダヤ系作家におけるツェラン受容と展開 ツェランからシンデル、ベッカーマンへ』を叢書として出版した。この論考は、本研究費での研究プロジェクトの核心部分を含みつつ、個々の作品の詳細な分析にも立ち入ることが出来た内容となった。すなわち、従来よりマリアヌ・ハーシュの〈ポストメモリー〉という概念を重視してきたが、それがパウル・ツェランというホロコースト第一世代(体験者)からローベルト・シンデル、ルート・ベッカーマンという第二世代(非体験者)の間に実際に顕現していることを具体的に提示できた点は成果と考えられる。

また、ドイツ語の論文(査読あり)として、“Literarische Abrechnung mit der Vergangenheit. Ueber zwei Werke der zweiten Generation vor dem ‘Ende der Zeitzeugenschaft’”を上梓した。本論は、第二世代の代表的作家であるシンデルの最新作『冷たい男(Der Kalte)』とドロン・ラビノヴィチの『どこか別の場所(Andernorts)』を扱いつつ、2010 年以降、第二世代の関心が、「ホロコーストの生き証人(第一世代)の死」と、「過去との決着」に新たに向かっていることを指摘した。これは第二世代文学の新たな展開として、欧米でもいまだ指摘されていない事実であり、研究期間が終わりつつある時点で、この現象を指摘できたことは価値あることと感じている。

(6) 2022 年度

2022 年度は、研究の総括の段階として、2010 年代～現在における第二世代ホロコースト文学の最新の潮流、新たな展開について重点的に研究を行った。具体的には、2010 年頃から、ホロコーストを実際に体験した世代(第一世代)がこの世を去ることを題材あるいは起点とする作品が散見されるようになったことを指摘し、自らも徐々に壮年になりつつある第二世代が、親世代の死をどのような形で乗り越えようとしているのかを示した。その際特に注目したのは 2017 年にドイツ書籍大賞を受賞したローベルト・メナッセの『首都』の分析である。本作はホロコーストの体験を、瓦解しつつある欧州連合のあり方と結びつけたもので、分析からは第二世代ホロコースト文学の嚆矢と言われるローベルト・シンデルの『生まれ』を意識しつつ、その乗り越えを企図していることがうかがえた。研究者マリア・ロカ・リザラズもまた著書『再克服するポストメモリー』において、第二世代の自己省察が始まっていることを指摘している。

上記のような研究からは、1980 年代から始まった第二世代のホロコースト文学が、現代の反

ユダヤ主義のみに焦点を当てていた段階を脱し、その問題を欧州連合の問題など、ヨーロッパのアクチュアルな社会事情と照らしながら再定義を模索していることがうかがえた。

本研究の最終段階において、このような新たな展開を捉えることが出来たことは価値あるものであったと考えられる。過ぎ去ったものとして歴史化することが許されないとされるホロコーストという犯罪に対する、ユダヤ人側からの応答に徐々に変化があることは、現代のドイツ語圏文学を分析する際に、きわめて重要な視点である。この点を具体的な作品に沿って示すことが出来たことは他の研究にも資するものであると考えている。

(7) 2024 年度

2024 年度は、本研究課題の最終段階として、〈第二世代〉のホロコースト文学の段階的発展状況と新たに生じた課題について概観し、さらに新たに生じつつある〈第三世代〉の作家や作品について報告することを目標とした。2010 年代以降、難民危機や EU の結末の揺らぎ、イスラム嫌悪、極右政党の台頭など、欧州は反ユダヤ主義以外の課題に直面しており、第二世代のホロコースト文学もそれらの問題とホロコースト記憶を結び付ける方向に向かった。もっとも、詳細な研究から うかがえたのは、ホロコースト記憶がグローバル化し、様々な社会問題と結合される文化アイコン化の状況であった。平行して、1970 年代生まれの〈第三世代〉の作家たちは、ホロコースト犠牲者、生還者であった家族から受け継いだ私的記憶を受け継ぐのではなく、メディアによって媒介された社会的記憶に基づいて作品を書いている。このように、記憶が私的なものから公的な記憶となること、すなわちホロコースト記憶が開かれたものとなり、所有権も特権的なものではなくなるという現象が起きており、今年度はそれが顕著に表れた作品を分析し、論考にまとめた。研究期間全体を通じて、1980 年代の第二世代の出現から、第一世代の消滅に直面した第二世代の作品群の新たな展開、そして第三世代の出現までを理論と作品の両面から通史的に捉えることができたのは成果であると考えている。第三世代も宗教への回帰、ユダヤ人という著者資格の喪失などの様々な新しい問題性を示しており、最新の状況を提示することができたことも、この分野の研究に資するものであると考えられる。

(8) 全研究期間を通じて

新型コロナウイルス感染症の世界規模での感染拡大の影響で、当初の 4 年間から、計 7 年間まで期間延長を行ったが、2020 年前後は、ホロコースト第一世代が世を去り、第二世代がこの分野の文学分野で中心的存在となっていく時期、さらに第三世代が文壇に現れ注目を浴び始める世代交代の時期であったこと、他方ヨーロッパ自体が EU の拡大、内部の結末の揺らぎを経験する時期にも当たり、「第二世代以降のホロコースト文学」が「ポスト・ホロコースト文学」へと変貌し、テーマの広がり、ホロコーストの記憶のみならず、それらをゼノフォビア、自国第一主義、反イスラム主義など、別の新たなアクチュアルな課題と結びつき新たな展開をするのを目の当たりにすることが出来たと言える。本研究は全世界的に展開している戦争記憶のグローバル化と並走する現象を追うものであり、ドイツ語圏文学の枠にとどまらず、世界規模の記憶論に資するものであったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 巻 149 |
| 2. 論文標題 羊から豚へ -ローベルト・メナッセ『首都』論- | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 文芸研究 | 6. 最初と最後の頁 75-95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 巻 145 |
| 2. 論文標題 Literarische Abrechnung mit der Vergangenheit. Ueber zwei Werke der zweiten Generation vor dem "Ende der Zeitzeugenschaft | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 文芸研究 | 6. 最初と最後の頁 27 - 43 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 巻 第136号 |
| 2. 論文標題 過去 / 現在の動的調停 ローベルト・シンデル『生まれ』論 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 文芸研究 | 6. 最初と最後の頁 21-42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 巻 82 |
| 2. 論文標題 <第二世代>のユダヤ系作家の詩的言語研究 ローベルト・シンデルを中心に | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要 | 6. 最初と最後の頁 95 - 126 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 巻 152 |
| 2. 論文標題 移動する記憶 ベンヤミン・シュタイン『キャンパス』論 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 文芸研究 | 6. 最初と最後の頁 13-34 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 福間 具子 |
| 2. 発表標題 <第二世代>のユダヤ系作家におけるツェラン受容と展開 ツェランからシンデル、ベッカーマンへ |
| 3. 学会等名 日本独文学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 福間 具子 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 一般社団法人日本独文学会 | 5. 総ページ数 74 |
| 3. 書名 生誕100年 パウル・ツェラン - その翻訳と受容の多様性 - | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| | | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|